

CHOSHI (第2話)

菅宮監督は、新チームの初陣である鹿嶋杯しか総体前の実戦練習はできないことから、敢えて神栖一中の1年生をマウンドに上げ、新チームの守備力をチェックした。しかし大会なので、負けたら次の試合の機会が失われてしまう。そこで、4回から満を持して川口を登板させた。

『ピッチャー川口』 キャッチャーとサードは神栖一中の一年生。1塁は昨年一人で神栖一中野球部を守った3年生。ショートは川口と二人で清真中の野球部を守った3年の菅澤。セカンドとセンターは少年野球の経験のある清真中1年の渡邊と小沼。レフトとライトは清真中2年生の篠塚と郡。そして菅宮監督。大会直前に役者が揃った。

川口の大きくふりかぶったモーションから、伸びのある速球に観客は息をのんだ。メンバーが揃ったことで、川口のボールもさらに伸びを増しているように見える。

『噂には聞いていたが、ここまでのボールとは。』試合を見に来ていた神栖一中の校長先生、相手中学校の監督、そして見ている人からもそんな声が聞こえてくるようだった。結果、川口は後続のバッターをほとんど三振にとり、試合は神栖一・清真合同チームが勝った。

翌週は、2回戦で優勝候補の一角の中学校と対戦した。ここで一つ問題が発覚した。相手は強力打線なので、川口が切れのあるスライダーを投げたのだがキャッチャーが捕れない。もしくは捕れたとしても、ボールを捕ることで必死になってしまって、バントなどの相手の揺さぶりになかなか対応できない。

『優勝候補になると、ただ打つだけでなく色々な方法で守備の乱れをついてくる。そのためにはあまりにもチームとしての経験がたりない。』そして、さらに困ったことになった。

新型コロナウイルス感染拡大により、神栖市に県独自の蔓延防止が発令された。そうすると市をまたいで合同練習をすることができない。結果、総体まで試合はおろか合同練習さえ出来なくなった。『折角、メンバーが揃ってこれから充実した調整が出来ると思ったのに。』私以上に選手、そして菅宮監督は悔しいだろう。とにかく、自チームで出来ることをして大会に臨むしかない。コロナ禍の中、予定の立たない日常に選手や保護者は巻き込まれていた。